

長門湯本温泉観光まちづくり計画を策定

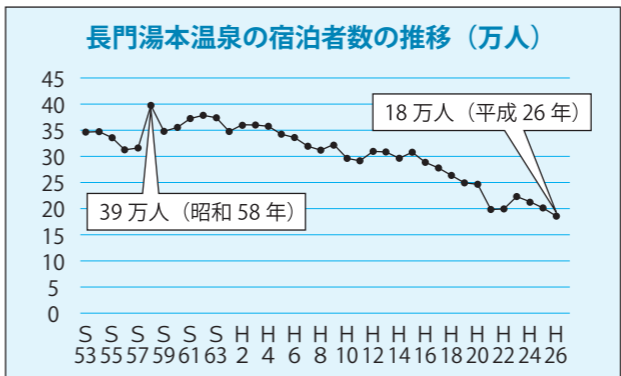
地域のタカラ、地域のチカラで湯ノベーション

長門湯本温泉街の再生に向け、「長門湯本温泉観光まちづくり計画」を策定しました。この計画は、魅力ある温泉街の形成に向け、市民の意見を踏まえて、星野リゾートとともにまとめたマスタープランをベースにしています。今後はこの計画に沿って、地域と民間事業者、行政とが一体となり、観光まちづくりの推進に取り組んでいきます。

長門湯本温泉の現状

長門湯本温泉の宿泊者数は昭和58年の年間宿泊者数39万人をピークに、下降傾向が続いています。特に平成20年以降は低迷を続けており、平成26年には20万人を切る水準まで低下しています。

この要因を特定することは難しいですが、旅行市場全体の約9割が個人旅行となり、旅行スタイルの変化に十分対応しきれなかったことが要因の一つと考えられます。



マスタープランの必要性

宿泊客の低迷に対し、長門湯本温泉においても個々の事業努力やイベントの開催などにより活性化策は積み重ねられてきました。しかし、旅行市場の変化に伴う悪循環や構造的な課題に対して、大きな目標と戦略性を持つ対策を講じていく「温泉街全体での意欲の不足」が、低迷を招いた本質的な課題であることを共通認識することが重要です。

長門湯本温泉が再生するため

計画の位置づけ

この計画は意欲的な取組を促すための将来像の共有であり、幅広い関係者による取組を継続するための「道しるべ」です。この計画をベースに長門湯本温泉が、温泉街としてその風情を再構築(リノベーション)し、後世まで誇れるまちとしていくために、また、培ってきた歴史と伝統を大切にしながら、新たな魅力を生む革新(イノベーション)を創出していくために、「湯ノベーション」を地域のチカラで興じていきましょう。

計画のサブタイトル

今ある資源に着目し、地域自身が主導して、再生に向けた取組を進める

地域のタカラ、

今ある資源、大切にしてきた歴史を活かしながら

地域のチカラで、

地域自身が主導して

湯ノベーション

長門湯本温泉(=湯)を、
リノベーション = 一体的な温泉街として再構築
イノベーション = 今の観光客にも魅力が伝わる観光資源に革新

観光まちづくりの推進

観光事業を通じて地域の存続を図る観光まちづくりに向け、専門家の意見も入れて妥協なく取り組む必要があります。

厳しい観光客目線での評価に耐え、継続的な取組を行ってこそ、地域の持続が実現できます。

■観光客の視点

- ・わざわざ行きたくなくなるか
- ・関心が持てるか
- ・観光客に伝わるか
- ・観光客が満足できるか

具体的な目標

全国人気温泉地ランキングで、長門湯本温泉は86位(平成27年度)となっております。この順位を上げ、トップ10に入る人気温泉地となることを計画の達成目標とします。これにより、継続的に温泉地の魅力を生み出す好循環を目指します。

達成時に期待される効果

観光客数、観光消費額ともに伸ばすことで、宿泊者数は現状



10位以内を目指す計画

順位	温泉地名	都道府県
1	草津温泉	群馬県
2	由布院温泉	大分県
3	下呂温泉	岐阜県
4	別府温泉	大分県
5	有馬温泉	兵庫県
6	登別温泉	北海道
7	黒川温泉	熊本県
8	指宿温泉	鹿児島県
9	道後温泉	愛媛県
10	城崎温泉	兵庫県
11	高山温泉	岐阜県
12	箱根温泉	神奈川県
13	和倉温泉	石川県
14	伊香保温泉	群馬県
15	玉造温泉	島根県
...
86	長門湯本温泉	山口県

観光経済新聞社 につぼんの温泉100選2015より

の年間18万人から33万人へ増加、また、日帰り観光客数についても現在の年間40万人から66万人を呼び込むことを目指します。これにより市内全体で年間200億円の経済効果が見込まれます。

分析から導く戦略の方向性

人気温泉地が持つ特徴や魅力を分析した結果、3つのタイプに分類することができます。

■タイプ1

自然から与えられた圧倒的な温泉資源を持つ温泉地
 (例：草津温泉、別府温泉、登別温泉、箱根温泉など)

■タイプ2

歴史資源で人が集まる温泉
 (例：道後温泉、下呂温泉など)

■タイプ3

自然を生かした魅力的な温泉街を持つ温泉地
 (例：由布院温泉、有馬温泉、黒川温泉、城崎温泉など)

これら3つのタイプを長門湯本温泉の持つ資源と比較検討した結果、長門湯本温泉は温泉地

がコンパクトで川や路地、外湯などの温泉街を形成する要素を備え持っていることから、「自然を生かした魅力的な温泉街を持つ温泉地(タイプ3)」により、10位以内の目標達成を目指すことが適しています。

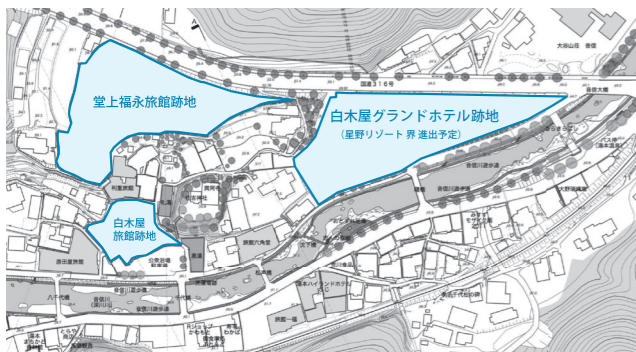
魅力を生み出す6つの要素

タイプ3に当てはまる温泉街の魅力の要素を分析すると、次の6つに集約されます。

- ①風呂(外湯)
- ②食べ歩き
- ③文化体験
- ④そぞろ歩き(回遊性)
- ⑤絵になる場所
- ⑥休む・たたずむ空間

この6つの要素を、長門湯本温泉の持つ資源をベースに表現していくことが、計画の基本的な考え方となります。

また、季節感の演出により適切なオフシーズン対策についても戦略的に進める必要があり、都市空間や造園空間、町並みなど一体的なデザインを行う「ランドスケープデザイン」の考え方を取り込んでいくことも魅力的な温泉街の創出には重要です。



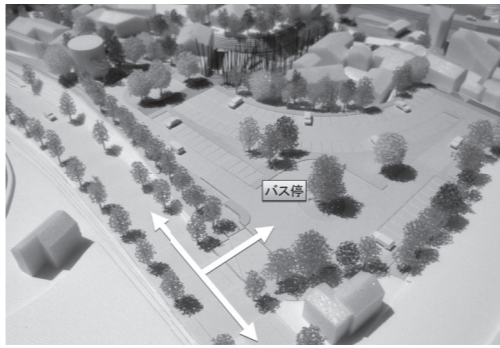
▲当面、開発の中心となるエリア

魅力的な温泉街を形成するために、大寧寺から三ノ瀬まで長門湯本温泉エリア全体を見据えた観光まちづくり計画を構築していく必要があります。しかし、広いエリアに着手することは費用面や具体的な検討を進める上で現実的でないことから、当面は「堂上福永旅館」「白木屋旅館」「白木屋グランドホテル」の各跡地を中心としたエリアに、魅力を生み出す6つの要素を表現する具体的な整備を進めていきます。

温泉街エリアの配置計画

非日常の温泉街への導入と顔づくり

① 駐車場・温泉街への動線整備
現在、温泉街には観光客を対象とした大規模な駐車場がないため、旧堂上福永旅館跡地に駐車場を整備します。国道316号沿いには樹木の列植、街灯の配置、木柵などの工作物により、温泉街があることを予感させるしつらえを施します。



▲国道316号から堂上福永跡地に整備する駐車場へ

② 駐車場と温泉街をつなぐ動線
駐車場から温泉街を抜け、音信川までを階段と坂道でつなぐ高低差18m、延長120mの最も重要な動線として、竹林の階段を整備します。観光客は駐車場から迷うことなく、温泉街の入口にアプローチすることができま



▲竹林に囲まれた静かで清閑な空気が非日常を演出

③ コアエリアA
旧白木屋旅館跡地を中心としたエリアを「コアエリアA」とし、観光まちづくりの柱となっている「川・湯・窯」の魅力が集積した賑わいの中心となる場所を整備します。

■ 恩湯の建て替え
長門湯本温泉の最も核となる施設で、長年市民に親しまれ、多くの人に利用されてきた恩湯ですが、老朽化や設備の不足など観光客を迎え入れる上での課題がありました。

そこで、2階建て程度で多くの観光客の利用に耐える規模と設備の施設としてリニューアルを行う計画とします。1階は温泉、2階は利用者が湯上がりどころとしてゆっくり休む空間とします。

外観デザインは、まちのシンボルとして市民に愛着を持ってもらえ、シンボリックで記憶に残り、観光客が入りたくなるデザインを目指します。

■ 雁木広場の整備

コアエリアAの中に、温泉街の大きな魅力である音信川との親水空間として「雁木広場」を整備します。

竹林の階段から音信川まで幅の広い緩やかな階段を結び、水際は川石で緩やかに囲まれた浅瀬を整備します。水に足をつけて涼を楽しめるだけでなく、階段をベンチ代わりに景色を眺めたり、店舗で購入した物を食べたりすることができるよう自由度高い空間とします。

また、四季折々のイベントを行う広場として、階段を客席代わりにコンサートを行うなどさまざまな利用が考えられます。

■ 文化体験・食べ歩き

文化体験が可能な陶芸ゾーンを整備します。陶芸技術を学びたい若者を国内外から受け入れ、滞在中の活動を支援する「アーティスト・イン・レジデンス」を検討し、制作者と一般の人々の交流の場を創出します。また、食べ歩きが楽しめるよう茶屋・土産店舗や観光案内所を整備し、観光客の回遊性を高める計画とします。

回遊性の創出

コアエリアAと一定の距離を置いた場所に、回遊の目的となる魅力的なコアエリアBを計画し、外湯めぐりによる回遊性が高まるよう礼湯を移設します。

① 礼湯の移設
現在の礼湯の利用者数は、恩湯の半分以下であり、せっかくの資源を十分に活用しきれていないのが現状です。

恩湯と礼湯という趣の異なる外湯を有することは、「外湯」と「回遊性」の要素を演出する上で絶好の素材であると考えられることから、恩湯とは離れたコアエリアBに礼湯を移設する計画とします。



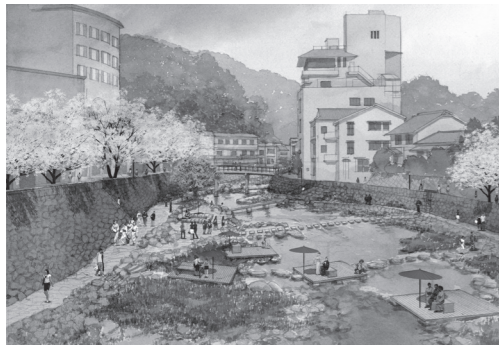
▲礼湯は旧ことぶき荘跡地に移設

② 音信川の河川整備

長門湯本温泉の魅力である川との親水性を高める空間づくりとして、川岸や流れの中にテラスを設置します。おとずれ足湯に近い配置とし、足湯の周囲に賑わいをもたらすことで、「休む・たたく」ことのできる魅力的な空間を目指します。

テラスにはベンチのような休憩施設や野点傘などを設け、特徴的なシンボルとすると同時に川のせせらぎの中でゆったりと時間を過ごすことができる休憩所として整備します。

また、水深が浅くなっている場所や賑わう場所に飛び石を計画し、回遊の自由度と利便性の向上を図ります。



▲川のテラスや飛び石など、印象的な風景を創出

そぞろ歩きの創出

魅力的な温泉街を生み出す要素の一つに「そぞろ歩き」があります。「そぞろ歩き」をしてもう一つは、空間の魅力や回遊性、ルートに沿って魅力的な要素が配置されていることなどが重要です。

計画では萩焼を中心とした文化体験をはじめ、お土産や食べ歩きなど、温泉街をそぞろ歩きする楽しさを演出します。

また、温泉街の風情をつくりあげるため、川沿いの護岸歩道や桜の小径の整備を行い、観光客が温泉街のそぞろ歩きを楽しんだり、季節に応じた風景を楽しめるような計画とします。



▲ショップやギャラリー、工房が並ぶ陶芸ゾーン

まちづくりの推進基盤

配置計画はあくまで起爆剤であり、継続していく取組のきっかけに過ぎません。長門湯本温泉の活性化に結びつけるには、さまざまな関係者が取組を進める上で必要となるコンセプトを共有し、同じ方向を向いていくことが重要です。今後は地元関係者などで議論を重ね、方向性を表すキーコンセプトを定める必要があります。

また、景観形成に向けたルールづくりや安心して散策できる温泉街の形成など、地域で守るべきルールづくりを進めていきます。

実現に向けた進め方

① 事業推進のあり方

本計画は、整備範囲が広いだけでなく事業内容も、インフラ整備から民間中心の店舗企画・運営まで多岐にわたります。このため、施設ごとの整備・運営は行政・民間それぞれの役割を明確にし、計画の実行にあたっては、民間事業者の取組を促すための適正な役割分担を構築する必要があります。

② 推進チームの構築

地域の代表者、事業者、専門家、行政が一体となったチームを構築し、事業全体のかじ取りをする司令塔のもと、具体的に提案していきます。

概算事業費とスケジュール

事業費は設計前の概算にすぎませんが、現時点で公民あわせで20億5千万円を想定しています。スケジュールは全体計画を平成33年度までに完成させる見込みとし、次の3つのステップに分けます。

- ① 推進基盤の確立
平成28年度
- ② 非日常の温泉街への導入と顔づくり・回遊性の創出
平成28年度～平成31年度
- ③ そぞろ歩きの演出
平成30年度～平成33年度

■ 計画の閲覧について

市ホームページからダウンロードできるほか、情報公開コーナー（本庁3階）および各支所で閲覧できます。

■ 問い合わせ

長門湯本温泉観光まちづくりプロジェクトチーム
Tel 23-1234



コアエリアA